

□書 評

高橋 正宜 著

「Color Atlas of Cancer Cytology」

順天堂大学医学部病理学教授

橋 本 敬 祐

George N. Papanicolaou がヒトの腔塗抹細胞で女性性周期や閉経期に関する論文を発表し始めたのは1933年頃からであるし、子宮癌細胞診は1941年以降であるから、wet smear としての Papanicolaou 法は今日で既に40年の歴史を持つといつてよいであろう。一方 dry smear に対してエオジンとメチレン青の混合によって生じるラズールを主体とする May-Grünwald や Giemsa の方法は Papanicolaou よりも更に20年から10年以上古い歴史を持っている。いずれもが光顕レベルでの単一細胞染色法、固定法としてほぼ完成された手技といつてよい。したがって、そこからは細胞に関する実に多様で豊富な形態学的情報をとり出すことができるものだという感を近頃ますます深めている。それは Papanicolaou の方法がわが国に入ってきた昭和20数年頃の予想を遙かに上廻っているばかりでなく、もはやこの方法がかったの血液形態学の隆盛を上廻る実用性と広い応用性を確立したことを意味している。この方面の学会活動では剝離細胞学国際学会が1962年に発足し、のち2年毎の International Academy of Cytology に変って第4回が昨年ロンドンで盛大に行なわれたし、日本臨床細胞学会とそのスクリーナー部会の活動も目覚ましい。日本臨床細胞学会と日本臨床病理学会共催の細胞検査士資格認定試験も今年12月で第4回を迎えようとしているところであるが、今

までに送り出した合格者数137名は決して多いとは言えぬとしても、その人達の能力は国際水準をたしかに抜いており、近々実現する国際的統一資格認定についても何等遜色なしと考えている。スクリーナー養成学級も増加しつつあり細胞診に対する社会の需要は一層大きいという実状である。

細胞診関係の著書も近年急激に増加して来た。いま10指に余る力作が世に出て大いに売れているらしい。それらの著者がいずれも油の乗り切った細胞診指導医であり、今日に到る経験の蓄積が堰を切って溢れ出した様相を呈しているのは一種の壮観でもある。

そのなかで高橋正宜博士の新著 Color Atlas of Cancer Cytology (医学書院1971年刊)は英文書きおろしであり内容的にもよく整い、まさに国際的に通用する標準的モノグラフと言いうるであろう。既に米国では Lippincott 社、独では G. Thieme 社といった老舗といえる大出版社が販売を引受けており、スペイン語版、イタリア語版もかなり進んでいる様子である。筆者はこの本の基礎になった高橋正宜博士の「図説癌の細胞診断」が出版されたときこのことを予想し推薦の拙文中に書いたが、6年後にそれが実現したことを喜ぶ者である。今回の内容は全く見違えるばかりに書き改められていて、大型オクターブ版(30.5×22cm) V+354頁 653図(うち色彩247

図)の大冊となった。価格も国内で13,700円と高いが逆輸入するとすればもっと高くなるであろう。

内容は General Cancer Cytology と Practical Cytology of Organs の2部に分かれ第1部92頁、第2部が9章238頁である。

第1部は著者が病理学者の立場に立って包括的記述を行なったもので随所に著者の業績が織り込まれて、かなり重味のあるハンドブック的なものとなった。

第2部は各臓器の個別的な細胞診図譜となっている。女性性器、乳腺、呼吸器、消化器、中枢神経系、体腔液、尿路、リンパ節、皮膚および粘膜の9章より成る。おのおのの章には採取法、正常組織と細胞成分、それらの変性所見や良性、悪性の要領のよい解説があり、文献の引用も豊富である。図譜の部分について言えば細胞診と組織診をどの章でも丁寧と比較して出しているのが目立ち大きい総合病院と大学での豊富な生検例、剖検例をよく使いこなしていると思う。

はじめに触れたように今日、医学領域での人体細胞学はその実用性と相俟って新しい知見がどんどん集められている。本書を Color Atlas とした著者の真意は知る由もないが著者が本書で試みている体系的な扱い方を今後も発展、充実させて行くことは著者として楽しい責務でもあろうし、これからの細胞診が学問的に進むべき方向でもあろうか。ともかく、腫瘍細胞診を系統的な態度で包括的に扱い、図譜としても充実している点はたしかに国際的レベルにあるどっしりした専門書の風格を見せている。

A4判、頁330、図20、写真200
¥13,700 千200 医学書院刊